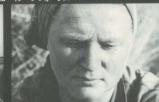


MARIA(MAPИЯ)

- 脚本・監督・ナレーション=アレクサンドル・ソクーロフ 撮影=アレクサンドル・ブーロフ 美術=セルゲイ・デビジェフ 音楽=ミハイル・グリンカ「子守歌」 アルフレード・シュニトケ「納税義務者名簿」(指揮=G・ロジェストヴェンスキー)/ベラルーシの民族音 楽/ほか●製作=タチヤーナ・アレシキナ(ゴーリキー・テレフィルム・スタジオ)
- ●出演=マリア・セミューノヴァ・ヴォイノヴァ(※嬶)/イヴァン・クリメンチエヴィチ・ヴォイノヴァ(夫)/タ マーラ・イヴァノヴナ・ヴォイノヴァ(娘) ●ロシア映画/1975-88年/40分/モノクロ+カラー/35ミリ/スタンダード/日本語字幕=ウサミ・ナ
- ●レニングラード記録映画スタジオ作品 ●配給=イメージフォーラム





大地の母マリアとエリツル大統領

●二部構成のドキュメンタリーで第一部はソクーロフの処女作。その後「エレジ ー・シリーズ」としてこの作品を含めて25本以上が制作されが、フョードル・シャリ アピン(オペラ歌手)、タルコフスキー、ランズベルギス(リトアニア共和国大統 領)、ポリス・エリツィン(ロシア共和国大統領)ら、主として有名人が取り上げられ ることになる。しかし、ソクーロフにとってこの無名の母マリア・セミョーノヴァは、ロシ アを代表する存在として彼らとまったく等価なものとして描かれている。

ロシアの母は働き者。男になんか任せておけない。

●列車が農村を構切って通り過ぎる。広大な平原で亜麻を栽培するヴェデニノ 村の働き者の農婦マリア。八月の太陽がさんさんと輝く中、マリアたちは集団で働 き、青空の下で一緒に食事をし、歌い、笑う。でも男たちといったら……。マリアの 生き生きとした表情、物思いに沈む表情。馬にまたがって水浴びする子供たちの情 景など、あまりにもみずみずしいソクーロフの詩的な映像はそれだけでも感動的だ。 息子の突然の死にもめげず健気に生きるマリア。夫と娘タマーラとのクリミア半島

でのやすらぎの休暇。

9年後、同じ村に向かったソクーロフを迎えた現実・・・・・。

●第二部の冒頭、車の窓から延々とぬかるんだ道や周りの民家を映し出す。この 見事な長回しの撮影はヴェンダースのロードムービー「アラバマ:2000光年」を 想起させるが、それは第一部からの長い年月を表わすと同時にある種の不安な感 情も呼び起こさせる。画面は一転してモノクロになる。再び村を訪れたソクーロフは 村人たちに第1部を見せようと上映会を開くが、会場にマリアは姿を見せない。代わ りに現われた娘タマーラから知らされたのは・・・・・。

本当の家族とは、そして愛とは。マリアは私たちばたくさんの ことを教えてくれる。

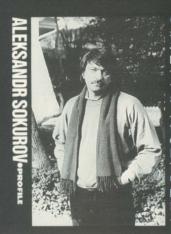
●この映画はマリアのように村の人々にとても愛されていた。マリアの顔のアップ がカラーで浮かび上がり、幸せな日々が甦る。第一部の断片がまるで運命の皮 肉を強調するかのように、繰り返しフラッシュバックされる。雪に覆われた森、そこを 通り過ぎてゆくトラック。教会の鐘の音や、鳥の泣き声。列車の窓から見えるモノク 口の風景。憂いを帯びた哀悼の響きのなかで、マリアの教えてくれたひとつひとつ

心を揺さぶる名曲の数々。感動の涙を誰もを押さえることは できない。

●全編に繰り返し流れる哀切なメロディは、19世紀、ミハイル・グリンカによる名曲 「子守歌」。第二部冒頭の快活な音楽は、ロシアの現代作曲家アルフレード・シュ ニトケの「納税義務者名簿」。エスニックなリズムは、ロシアとポーランドの境に位 置するベラルーシ(白ロシア)の民族音楽。そして、最後にカンツォーネ「マンマ」が 流れる時、あなたはこの映画との出会いを一生の思い出にすることでしょう。

この映画はロシアの農婦マリアの思い出に捧げられたレ

●ソクーロフは語る「マリアは生涯、亜麻を作って過ごした。彼女の人生には、農 民のみが知る畑仕事の知恵が溢れていたことだろう。私はもう一度あの村に行き、 続編を撮ってみたい。そのときの主人公はマリアの娘タマーラになるだろう」



●1951年、イルクーツク生まれ。'80年 から'87年にかけて製作した映画はこと ごと〈公開禁止となるが、'87年のペレス トロイカ以降、続々とその作品が紹介され ている。公開禁止中から現在にいたるま でその旺盛な創作意欲は止むことなく、 年に1本から2本の長編劇映画とドキュ メンタリーを作り続け、いまや現代映画を 代表する作家として、その1作1作が世界 の映画人に衝撃を与えている。代表作に 『マリア』('75-88)、『狐 独 の 声』(' 78/87年公開)、一連の「エレジー・シ リーズ」、「日蝕の日々」('88)、「セカン ド・サークル』('90)、『ストーン』('92)、 「ロシアン・エレジー」('93)、『静かなる -頁」('93)などがある。

10月8日(土)より独占連続ロードショー公開。 **特別観賞券は都内各プレイガイド、チケットセソン、チケットびあ、劇場窓口、セソン系劇場にて発売中。

静かなる一頁 ●10月8日(±)より

10月8日(土)	1:00	3:05	5:10	7:45
10月9日(日)	1:00	2:30	5:10	7:15
10月10日より連日	1:00	3:05	5:10	7:15

【公開記念連続トークショー】①10月8日出午後6時45分より。ゲスト=鳥田雅彦氏(作家)/210月9日日午後4時より。ゲスト=蓮實重彦氏(映画評論家)/入場無料。ただし両日とも当日映画をご覧になる方のみ入 場できます。定員制ですので当日午前11時よりトークショー整理券を発行

特別観賞券1.400円●[当日]一般1,700円/学生1,400円(税込)

マリア ●10月8日土より

全期間中連日昼夜2回 昼12:00 夜9:20

特別観賞券1,000円●[当日]一般1,200円/学生1,000円(税込) 03・3403・6061■

セカント・サークル ●11月中旬より

11月上旬より連日 1:00 3:05 5:10 7:15

特別観賞券1.400円

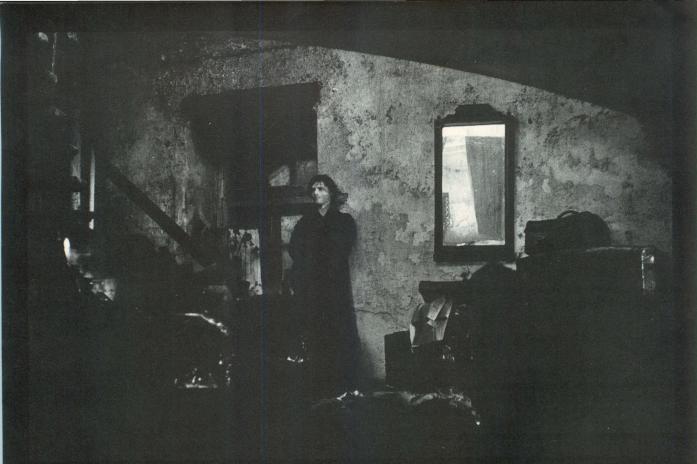
●【当日】一般1,700円/学生1,400円(税込)

3作品通し券3,500円

●当日合計4,600円のところ(税込)







WHISPERING PAGES (ТИХИЕ СТРАПИЦЫ)

●脚本・監督=アレクサンドル・ソクーロフ

- ●撮影=アレクサンドル・ブーロフ●美術=ヴェーラ・ゼリンスカヤ●音楽=グスタフ・マーラー「亡き子 をしのぶ歌」(歌詞=フリードリヒ・リュッカート/演奏=マリインスキー劇場交響楽団/指揮=アルギトラ ス・パウラヴィチュス)/〇・ヌッシオ「音楽と絵画」(指揮=G・ロジェストヴェンスキー)●編集=レダ・セミ ョーノバ●ダイアローグ=ユーリー・アラボフ/アンドレイ・チェルヌィフ● 製作=タマーラ・モギリニコヴ
- ●出演=アレクサンドル・チェレドニク(主人公)/エリザヴェータ・コロリョーヴァ(少女)/セルゲイ・バル
- ●ロシア+ドイツ合作映画/1993年/1時間17分/モノクロ+カラー/35ミリ/スタンダード/日本語字 ●北方財団(サンクトペテルブルグ)+エスコム・フィルム(シクチフィカル)+ゼロ・フィルム(ベルリン)
- 作品●配給=イメージフォーラム
- ●1994年ベルリン国際映画祭、サンフランシスコ国際映画祭、カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭、ロカル /国際映画祭、エジンバラ国際映画祭、レミニ映画祭、ゲント映画祭、ダンケルク映画祭、シカゴ国際 映画祭、ストックホルム映画祭、ほか特別招待作品



'94年ベルリン映画祭、世界の映画人は『静かなる一頁』 の登場にその衝撃を隠すことはできなかった。 そこに新たなる巨匠の登場を見たからだ。

●この作品はソクーロフ第25作目にあたる待望の最新作。タルコフスキー、パラ ジャーノフ以降の旧ソ連を代表する映画監督として知られていたこの監督が、いま やゴダール、タルコフスキーともに現代世界映画を代表する作家として新たなステ ージに登場したことに誰もが息をのんだ。エイゼンシュテイン以来の映画大国ロシ アは、ペレストロイカとその後のソ連邦崩壊とともに再び新たな才能の数々を続々 と登場させているが、その最大の収穫がソクーロフである。

ドストエフスキーの『罪と罰 など19世紀ロシア文学の伝統

が20世紀末、偉大なる映画芸術として初めて豊穣の花を 開かせた。

●19世紀ロシア文学を代表するフョードル・ドフトエフスキーのみならず、ニコラ イ・ゴーゴリ、ニコライ・オストロフスキー、マクシム・ゴーリキーらロシア文学の巨匠 からインスパイアされたこの作品は、文学を映画化した文芸作品などではなく、まさ に映画芸術として、20世紀初頭のロシア・アヴァンギャルドの実験精神すら内包 する壮大な企図を予感させる作品として完成した。

神と人間、「絶望と救済」そして人間にとっての「罪と罰」とは 何か?

19世紀的主題が新たなイメージとSF的とでも言える独創 的な手法でよみがえった傑作!

●19世紀末を思わせる霧に濡れそぼる波止場。乞食や娼婦、ちんぴらなどがたむ ろする廃墟のような街角に老婆殺しのニュースが伝わる。主人公の若者とざわめき たつ人々。我先に建物から嬉々として飛び降りる人々。その先は死か、あるいは幻 想の水中都市か。殺人を犯した孤独な青年と娼婦に身を落とした薄幸の少女と の出会い。神を信じて救いを求めなさいと迫る彼女に、若者は神などいないと言葉 を吐き棄てるが……

ドラマはまるで宇宙船を思わせるような不思議な空間の中で繰り広げられる。スト ルガツキー兄弟などロシアSF文学にも通じる映像感覚にソクーロフの並々ならぬ 才能が発揮される。

聖なる娼婦を演じるのは撮影当時、弱冠14歳の美少女 エリザヴェータ・コロリョーヴァ。

●そして主人公を演じるのも、いかにもソクーロフ好みの美青年アレクサンドル・チ ェレドニク。まったく無名の二人にもかかわらず、その魅力的な存在感はこの重厚な 内容に相応しい奥行きを与えることに成功している。

マーラーのスタイルはドストエフスキーにとてもよく似ている。 ソクーロフ

●まさにこの映画のために書かれたのではないかと思わせる美しい調べは、G・マ ーラーの歌曲「亡き子をしのぶ歌」。ドイツのロマン派詩人F・リュッケルトの詩に、 自らの死の運命を自覚したマーラーが書いた一曲と言われている。ソクーロフはこ の曲こそ『静かなる一頁』全体の雰囲気を形作っていると語り、ドストエフスキーと マーラーの作品の近似性を強調する。

●監督=アレクサンドル・ソクーロフ

●脚本=ユーリ・アラボフ●撮影=アレクサンドル・プーロフ●美術=ウラジミール・ソロヴィヨフ●音 楽=O・ヌッシオ「音楽と絵画」(指揮=G・ロジェストヴェンスキー) ●編集=ライサ・リソヴァ ●製作= V·D·シュリーク

●出演=ピョートル・アレクサンドロフ(主人公の青年)/ナデージダ・ロドノヴァ(葬儀屋)/タマーラ・チ モフェーエヴァ/アレクサンドル・ブィストリャコフ

●ロシア映画/1990年/1時間33分/カラー/35ミリ/スタンダード/日本語字幕=児島宏子

●ソヴィエト文化基金レニングラード支部創作活動センター作品●提供=イメージフォーラム



この映画に描かれている唯一の出来事は、父を葬るという 息子の痛まし義務である。

しかし、それはまだ生きている全ての人々にとっても切実で身 近なことである。

●猛吹雪のなか、悪い知らせを受け、しばらくぶりに家に帰って来た一人の青年。 ベッドに静かに横たわったまま動かない父親。機械的に現場検証する当局の男た ち、死因を「ガン」と宣告する検死の女医、段取りと葬儀代の交渉をする葬儀屋。ま るで「死の舞踏」の様な不条理な儀式に、ひとり青年はなすすべもなく翻弄され続 ける。

父親との葛藤。父親的なるものとの葛藤。

●筋金入りの共産党員で収容所の所長だった父親に反発して家を飛び出した 息子が、再び出会ったのは一体の死体であった。父の身体を丹念に洗い、添い寝 した青年は悪夢を見る。不気味な沈黙のなかでの男たちとの揉み合い・・・・・。雪景 色のなかの堅く閉ざされた門。目覚めた青年は死体のまぶたをそっと押し開く ……。青年は最後まで火葬を拒み続けた。

彼にとって「死」はとても親しいものになった。

●主人がいなくなった部屋で、遺品を点検する青年。煙草入れ、ブローチ……。残 ったベットの毛布を丸め、マットをたたむ。彼方に、火葬場の炎の暗示か、コンクリ 一トのアパートが炎を吹き出して煌々と燃えている。その脇に青年のシルエット。彼 はやがて、炎に向かって「何か」を投げ入れた……。

幻想と覚醒の間を往き来するドキュメンタリー・タッチのリアル

●主人公の青年(ピョートル・アレクサンドロフ)に扮するのはレニングラード工科 大学の学生、「葬儀屋」を演じる快活な女性(ナデージダ・ロドノヴァ)はまったくの 素人と、多くのドキュメンタリー映画を手掛けるソクーロフはここでも人物のリアル な存在感で「死と現実」の〈煉獄〉を映し出す。舞台となったシベリアの小さな町 は、ソクーロフ自身が育った土地からインスパイアされており、この物語には多くの 彼の記憶が詰め込まれている。また、この映画にチェルノブイリの風景を見ること ができるかも知れない。

芸術の役割は人々が人生の困難に立ち向かうための勇 気を与えることだ

●ソクーロフはまさにそれをなすべき物語を見つけた。主人公は「死」だけに取りつ かれているわけではない。社会の状況を見据えているのだ。「死」が何の意味をも 持たなくなったとき、その社会は完全に崩壊する。「死を意識することができるとき、よ うやく人生と人間であることの意義があらわになる。さもなければ死と生の境界は無 いに等しいのだから

この映画は今のロシアを象徴する

●1990年、ヨーロッパ映画界は各国際映画祭で、自由化の波が押しよせてきた 東側諸国の映画の紹介に熱意を燃やしていた。なかでも、旧ソ連の俊英ソクーロ フの名は大きく取り上げられ、翌年、この映画をひっさげてロッテルダム、ベルリン 両国際映画祭に現れた時はメインのゲストとして熱烈な歓迎を受けたことは記憶 に新しい。このソクーロフの言葉からも、一見単純に見えるこの物語のなかに、旧 ソ連としての「父親」の死を連想することができるだろう。この映画の製作時は、まさ にゴルバチョフ政権の衰退と、エリツィン台頭の新旧政権交代時期だった。

